【解説】

一丁は六十間である。一間は曲尺（かね）で六尺＝1.82ｍであるから、八丁あると唄われた明治の頃の銀座は、方辺として約１０９ｍの広がりを、煉瓦で覆われた路があったようだ。

江戸の町には川がある。川は水道でもあり、運河の役割もするわけで、川岸を端（はた）と云い船着き場があるものである。その長さが、三十間あるのだから、ザッと５０ｍもある掘り割りを成していたのだろう。

「銀座八丁」の中には今も小さな神社が何カ所も祀られているから、地蔵尊もあった筈だ。その地蔵尊の縁日（祭典日）には参詣人を目当ての露天商が並んで大通りは賑わっていたのだ。

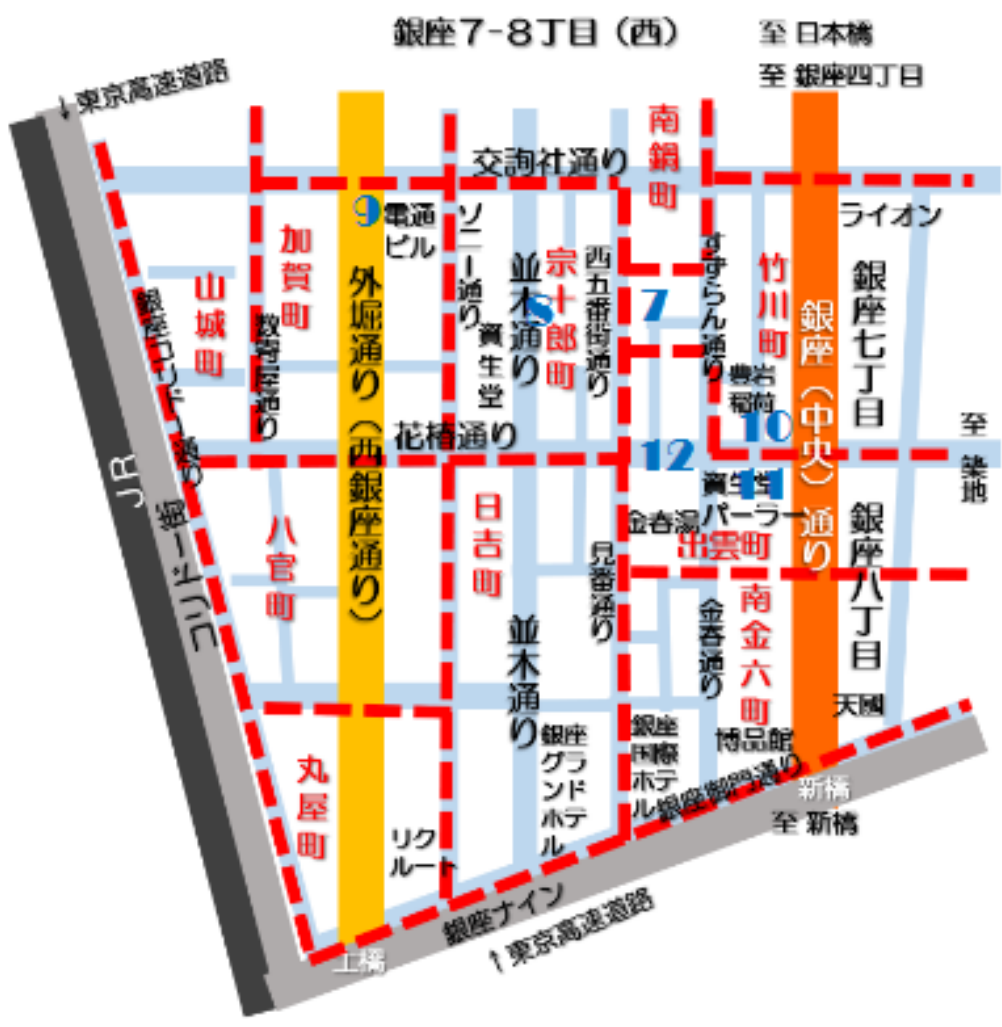
新橋は花柳界のある街だ。夜ともなれば、芸者さんの出番だ。夜店の横で、芸者になった幼馴染みとバッタリ出逢ったというシーンがこの歌である。

「あら、ヒロさんじゃありませんか」

芸者さんは首筋から後ろに開いた背中に白塗りをしていて、その白粉（おしろい）の香は色っぽいもので、行き交う人達が、つい振り返ってしまうと云っている。「仇（あだ）な香り」は「婀娜（あだ）な香り」と書くべきだが、花街の業界用語で「仇」と書く。女の色気は諸兄の心を惑わす敵であるからかなあ？

金春通りは今もある。金六町は大阪夏の陣の功労者「柴田金六」の拝領地であったらしく、現在の銀座一丁目あたりである。板新道は、「いたじんみち」と呼んだ。現在の銀座八丁目あたりか。

その芸者さんは幼馴染みが好きだったらしいが、竹川町に住んでいた彼に、「あなたに心の丈を打ち明けられなかった」ようだ。心の丈は、竹川町に掛けてある。竹川町は寛永時代から古称であり、現在の銀座七丁目あたりである。



往時はガス灯の時代である。脚立を持って銀座に灯をともす職業が「点灯夫」である。男は、夜の帳（とばり）につつまれてしまう前に灯（とも）して回らねばならないので、急いで駆け出して行く。

そんな若い二人であっても街の変化は激しく、「幼い頃から、随分と変りましたね」と懐かしんでいるのだ。そんな風情を、「お座敷」では地方（じかた）のお姐さんの三味線で、立方（たちかた）の芸者衆が踊ってくれる小唄である。

令和四年四月二十八日

大中臣正比呂　拙訳